《国指定史跡》

史跡 勝坂遺跡公園

縄文へのこみち
勝坂遺跡公園

大自然の中の縄文時代

体感公園

勝坂遺跡～縄文の集落景観を再現した遺跡公園

勝坂遺跡はわが国を代表する縄文時代中期の集落跡です。鳩川や湧水、谷戸、台地からなる起伏に富んだ勝坂の地で、今から約5,000年前頃にいくつもの集落がつくられました。太古のむかしの活発な生活の舞台が、現代に勝坂遺跡群として残されたわけです。この内、遺跡公園として整備した勝坂遺跡D区と、大正15(1926)年に大山柏氏らによってはじめて調査された勝坂遺跡A区の一部が国史跡に指定されています。

【史跡勝坂遺跡の概要】
■指定年月日／昭和49年7月2日（昭和55年、59年、平成18年追加指定）
■指 定 面 積／ 23,718.61㎡

■竪穴住居（笹葺）

■1号住居
時期：縄文時代中期後葉(約4,700年前)
復元住居 屋根：笹葺 柱材：クリ

約4,700年前の住居を復元しました。勝坂遺跡D区では、竪穴住居の跡が80軒以上発見されていますが、同時に存在したのではなく、長い年月の間で住居の構築・建替・廃絶を繰り返して集落が継続された結果と考えられます。

東京都港区の伊皿子貝塚で発見された焼失住居の調査で、屋根葺材と考えられるアズマネザサが発見された事例を参考に、全国的にもめずらしい笹葺住居として復元しています。

■竪穴住居（土葺）

■3号住居
時期：縄文時代中期後葉(約4,700年前)
復元住居 屋根：土葺 柱材：クリ

竪穴を掘った土を屋根に葺いて利用した土葺住居は、保温性に優れており、石囲いの炉に火を焚いて暖をとっていたと考えられます。一方で、雨漏りや湿気のため、湿潤な時期に住むのには適さず、寒い時期だけの「冬の家」とも考えられています。

■敷石住居展示

■30号住居
時期：縄文時代中期末葉(約4,500年前)
レプリカ展示

縄文時代中期の終わりごろになると、それまでの竪穴住居から構造が大きく変わり、柄鏡の形に石を敷いた住居（柄鏡形敷石住居）が登場します。

30号住居の発掘当時の状況をレプリカ展示してあります。

■復元住居2棟と敷石住居のレプリカを展示
■園内の植栽は縄文時代の雰囲気を再現

縄文生活林

磨製石斧

縄文人は生い茂った森を磨製石斧を使って切り開き、集落をつくります。集落周辺では木の実の採集、建築材や木製品に使う木材の伐採、薪燃料の確保など、周辺の樹林を様々に利用していたと考えられます。

埋没谷

発掘調査で確認された埋没谷

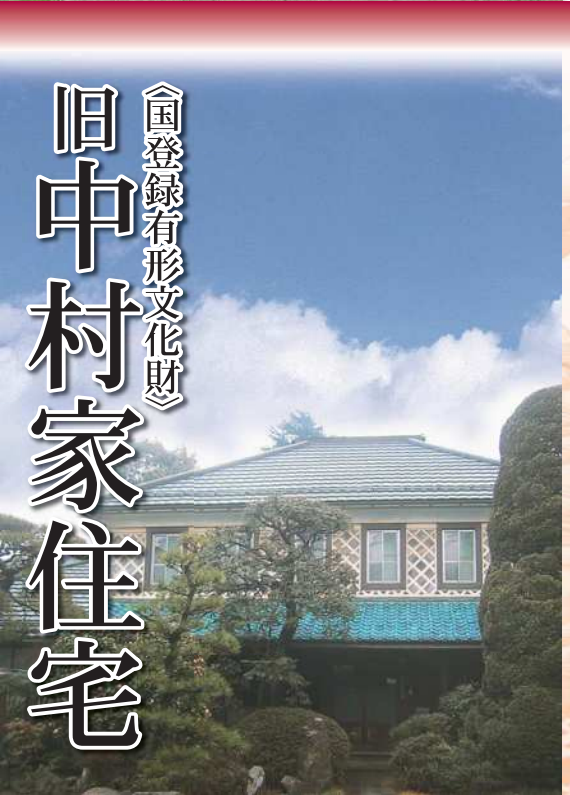
勝坂遺跡は、鳩川流域沿いや湧水の流れる谷戸沿いにつくられた縄文集落群です。勝坂遺跡D区は北と南に集落がつくられており、その間に埋没した谷が走っていました。

廃絶住居（窪地）

廃絶住居（窪地）

打製石斧などの土掘り具を使って深さ1m前後まで掘られる竪穴住居は、10数年程度で住居としての役割を終えたと考えられています。竪穴住居の内部には、やがて土が流れ込んで埋まりはじめます。縄文集落の一時的な景観とは、このように現に使われている住居と、廃絶されて住居「跡」となった窪地が見えていたと考えられます。その後、窪地は格好のごみ捨て場として利用されており、発掘調査すると大量の土器や石器が発見されます。

●史跡勝坂遺跡公園●　相模原市南区磯部1780番地
アクセス／ JR相模線下溝駅下車「下溝」バス停から「相武台前駅」行きで「上磯部入口」バス停下車徒歩5分　※下溝駅からは徒歩20分
入園自由　管理棟の利用、復元住居内の見学は水曜日から日曜日と祝日の午前９時～午後４時です。（12月29日～1月3日を除く）
公園への入園、復元住居外観の観覧はいつでもできます。
＜お問い合わせ＞ 相模原市教育委員会文化財保護課　042-769-8371



《国登録有形文化財》

旧中村家住宅

幕末へのこみち
旧中村家住宅

幕末期の擬洋風建築

旧中村家住宅主屋と長屋門

旧中村家住宅主屋は、全国的にも珍しい幕末期の擬洋風建築※です。建築当初は3階建てでしたが、関東大震災後、3階部分は取り除かれ2階建てとなっています。建築を手がけたのは鎌倉大工の石井甚五郎で、10年の歳月をかけ完成したと伝えられ、板に記した設計図が残されています。建物の特徴は、1階の外観は和風の要素でまとまっていますが、2階は外壁を海鼠壁※とし、洋風の要素として軒を曲線の白漆喰で塗りこめ、正面に縦長の窓を配しています。

長屋門は、桁行63尺（約19m）の長大なもので、主屋と同時期の慶応年間（1865～1868）に建てられたと推定されます。

※擬洋風建築…洋風に似せた建築のこと。
※海鼠壁…壁に四角い瓦を斜めにならべ、その継ぎ目を漆喰で盛り上げて白く塗ったもの。

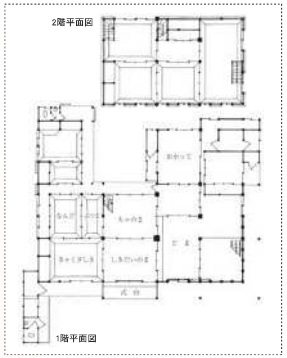
式台の間（奥）

茶の間

長屋門

【旧中村家住宅の概要】
■登録年月日／平成18年3月2日
■主　屋／ 1棟　木造2階建　延べ床面積　420㎡（1階部分　334㎡）（2階部分　86㎡）
■長屋門／ 1棟　木造平屋建　床面積　88㎡
■敷　地／ 1筆　宅地　面積　1,869㎡

【各階平面図】一部現在と異なります



式台の間と茶の間以外は見学できません

中村家と国指定史跡勝坂遺跡

勝坂遺跡の調査の歴史は古く、大正15(1926)年にまでさかのぼります。その年の夏に、休暇で帰省した学生の清水二郎氏が、中村家当主であった中村忠亮氏の所有する畑で採集した土器を、考古学者の大山柏氏に標本として渡し、大山氏による最初の発掘調査が行われました。

この時発見された厚手で装飾性豊かな土器が注目され、後年「勝坂式土器」として、中部・関東地方の縄文時代中期のめやすとされました。

発掘した地点は、旧中村家住宅裏手の勝坂遺跡A区の一画で、「勝坂式土器発見の地」の案内板が設置されています。

▲関東大震災以前の主屋写真をデジタル合成で彩色したものです。

●旧中村家住宅●　相模原市南区磯部1734番地
アクセス／ JR相模線下溝駅下車「下溝」バス停から「相武台前駅」行きで「勝坂入口」バス停下車徒歩5分　※下溝駅からは徒歩25分
入館無料　開館時間：午前９時半～午後４時
休館日：月曜日～水曜日（但し祝日は開館）、12月29日～1月7日
休館日は外観のみ観覧できます。
＜お問い合わせ＞ 相模原市教育委員会文化財保護課　042-769-8371

発見のこみち KASSAKA 勝坂

散策マップ

〈国指定史跡〉史跡 勝坂遺跡公園

縄文時代中期(約5,000年前)の大集落跡です。大正15(1926)年、大山柏氏によって発見された土器は、装飾的な文様や顔面把手(顔を表現した取っ手)などによって注目を浴び、後に「勝坂式土器」として縄文時代中期のめやすとされました。

また、同時に発見された多くの打製石斧を、土を掘る道具と考えて原始農耕論が提唱されました。

勝坂遺跡A区

平成18年に新たに追加指定された区域で、現在国指定史跡として保存しています。大正15年の大山柏氏の調査地点であり、この付近が勝坂式土器の発見の地といわれます。

国登録 有形文化財(建造物)「旧中村家住宅主屋」

唯一現存する幕末期の擬洋風建築です。建築当初は3階建てでしたが、関東大震災後3階部分は取り除かれ2階建てとなっています。建築を手がけたのは鎌倉大工の石井甚五郎で、10年の歳月をかけ完成したと伝えられ、板に記した設計図が残されています。

相模原市登録 天然記念物「勝坂のホトケドジョウ」

ホトケドジョウは、本州、四国東部に分布し、湧き水の流れるゆるやかな細流に生息する淡水魚です。

かつては市内で普通に見られる魚でしたが、環境の変化などにより生息地が減少し、今では国や県の選定する「絶滅のおそれのある種」となっています。

市内では数か所で生息が確認されていますが、勝坂の生息地は貴重な谷戸の景観が残されています。

写真提供
神奈川県水産技術センター内水面試験場

相模原市登録 天然記念物「勝坂の照葉樹林」

シラカシを中心とする照葉樹が二次的に回復したもので、相模原台地の原植生を現代に伝える貴重な天然記念物です。

史跡勝坂遺跡西側の段丘崖ではクヌギ・イヌシデ等の雑木林の名残と、シラカシ・ケヤキの大木などのある照葉樹林が見られ、低木層にはアオキ・ヒサカキ・タブノキ・シラカシ・ヤツデ・シロダモ等の照葉樹が見られます。

石楯尾神社

いわだておじんじゃ

創建は不詳、再建は寛永12(1635)年で大己貴命を祭神としています。明治時代初期までは「羽黒権現社」と称していました。

勝源寺

しょうげんじ

「新編相模国風土記稿」(天保12(1841)年成立)によれば、龍鳳寺(厚木市)の末寺で山号を金澤山といい、千手観音を本尊としています。当寺には「六本庚申」と呼ばれる青面金剛像が安置され、明治から大正時代にかけては養蚕守護を願う参拝客でにぎわったといいます。

青面金剛像

史跡勝坂遺跡公園管理棟

有鹿神社

あるかじんじゃ

相模国の延喜式内十三社のひとつである有鹿神社(海老名市)の奥宮といわれ、4月に海老名の有鹿神社関係者により「有鹿さまの水もらい」と呼ばれる神事が行われています。

現在は簡素化していますが、明治時代までは本宮から神輿で御神体が渡御し、4月8日から6月14日までの2ヶ月あまりの間、御神体をここに留め置いたといわれます。

谷戸の風景

田んぼ、畑、湧き水等が見られ、野鳥等多様な生き物が生息しています。

散策にあたっては、自らのゴミやペットの糞は必ず持ち帰りましょう。貴重な自然環境を守るため、水路や湿地を荒らさないように気をつけましょう。

2017.3